

上に, BALB/c 系統に由来するがん感受性遺伝子座の存在を, また5番染色体上には BALB/c 系統に由来する, がん抵抗性遺伝子座の存在がそれぞれ示唆された. この可能性を確認するため, 各遺伝子座領域のコンジェニックマウスを作製し, 再度同様に照射実験を行ったところ, 4番染色体 (D4 Mit12/338) に関する解析において, C/M パターンのマウス平均生存期間は 246 ± 10 日, M/M パターンのマウス平均生存期間は 275 ± 7 日となり, 両者間に有意な差 ($\chi^2 = 8.89$, $p = 0.0029$) が認められ, この遺伝子座に BALB/C 系統に由来するがん感受性遺伝子の存在が確認された. コンジェニックマウスを用いた2番染色体, 5番染色体の, がん感受性・抵抗性遺伝子座については, 現在解析検討中である.

4 Gastric carcinoma with lymphoid stroma (GCLS) の検討

橋立	英樹	渡辺	英伸	(新潟大学)
味岡	洋一	西倉	健	(第一病理)
安保	徹	渡部	久実	
宮川	亮子	内藤	哲也	(同医動物)
菅原	聡	良田	裕平	(同)
相場	恒男			(第三内科)

【目的】胃癌において, 癌巣周囲に強いリンパ球浸潤を伴うタイプの癌があり, (Gastric) Adenocarcinoma with lymphoid stroma (GCLS) と呼ばれ, 通常の胃癌に対して予後が良好であり, さらに Epstein-Barr virus (EBV) が関与することが知られている.

【目的】GCLS の浸潤リンパ球の特性および EBV 感染との関係を調べる.

【材料・方法】GCLS 外科切除固定材料28症例について, 免疫組織化学にて GCLS の粘液形質を, In situ hybridization 法にて EBV RNA を, 新鮮材料が入手可能であった5例については Flowcytometry にて腫瘍浸潤リンパ球をそれぞれ分析した.

【結果】1) GCLS ではほとんどの症例 (93%) で EBER-1 が陽性であった. 2) GCLS は多くの症例 (89%) で胃型粘液形質を示した. 3) GCLS の TIL は末梢血に比べて NK cell が少な

く, CD8 + T cell が多い傾向があった.

II. 特別講演

「免疫系の標的細胞傷害機序」

順天堂大学医学部免疫学

八木田 秀 雄

第61回新潟癌治療研究会

日 時 平成13年7月28日(土)
午後1時40分～5時40分
会 場 新潟東映ホテル1F
白鳥の間

I. 一般演題

1 遠隔転移をきたした頭頸部扁平上皮癌10例の臨床病理学的検討

長島	克弘	星名	秀行	
高木	律男	永田	昌毅	
藤田	一	宮本	猛	(新潟大学大学院)
相馬	陽	関	雪絵	(医歯学総合研究科)
福西	雅史			(顎顔面口腔外科)

悪性腫瘍の転移は, 予後を左右する重要な因子である. 特に遠隔転移を生じた場合には, 患者の生命予後は絶望的となることが多い. このような遠隔転移の可能性を未然に予測し対応することができれば, 予後の向上が期待できる. そこで, 口腔癌の原発巣および頸部リンパ節が制御されているにもかかわらず, 数か月後に遠隔転移が確認された症例を対象に, 臨床病理学的に検討を加えた. 対象症例: CT の日常稼働, CDDP 多剤化学療法を導入した1984年以降の頭頸部扁平上皮癌193例中の10例である. 検討項目: 原発部位, TNM